



新しい年を迎える準備をお手伝い

いわて生協バスボランティアで、仮設住宅の窓拭きを実施



1枚1枚丁寧に窓拭きをするバスボランティア参加者。

いわて生協が、2011年6月から開催しているバスボランティア。12月12日、88回目のバスボランティアが開催され、28人が参加。仮設住宅の窓拭きチームと、地域の憩いの場づくりのお手伝いチームの2手に分かれ、作業を行ないました。



再生の里 ヤルキタウン外観。

12月12日、いわて生協のバスボランティア参加者28人のうち18人が仮設住宅での窓拭きを行ないました。

これは、いわて生協が継続して開催している仮設住宅での「お茶っ子会」で、

「高齢者は高いところに手が届かないから、窓拭きをしてほしい」という要望が出され、それに応える形で立てられた企画です。事前に全戸に案内を配布、窓を磨いてほしくない方は、玄関に印をつけておくようお願いがされていました。

窓拭きを開始する前のオリエンテーションでは、いわて生協の職員から、窓拭き以外に何か要望がないかを入居者にお聞きするよう参加者へ呼び掛けがありました。今後どのようなボランティアを行なっていくか、入居者の声をもとに考えていくためです。参加者は、3～4人

ずつに分かれ、36戸の窓を1枚ずつ丁寧にふきあげていきました。

窓拭きは午前中で終了し、午後からは地域の憩いの場づくりを行なっているチームへ合流。12月15日に開店するコミュニティ広場「再生の里 ヤルキタウン」^{*}で球根植えを行ないました。バスボランティアの活動で何度か「ヤルキタウン」を訪れたことのある参加者は、オープン目前の様子に感慨深げでした。

^{*} NPO法人「再生の里 ヤルキタウン」が運営。6面で理事長の熊谷耕太郎さんのコメントを掲載しています。

5,784 枚のクリスマスカードをお届け

沿岸部に住むいわて生協の組合員へお菓子を添えて



共同購入の職員がお届けしました。

いわて生協は、12月10日～14日に、共同購入（宅配）を利用している沿岸部の組合員へ、全国から寄せられたクリスマスカードを届けました。このカードは、コープとうきょう・コープかながわ・コープしずおか・市民生協やまなし・コープあいち・コープかがわ・コープおきなわの組合員

から送られてきたもので、合計5,784枚になりました。

カードには、津波の被害を受けた地域の福祉施設5カ所で作られた約5,000個のお菓子が添えられました。このお菓子はいわて生協が購入したもので、いわて生協組織本部コープ活動支援グループチーフの小野寺真さんは、「少しでも被災された沿岸部の皆さんの仕事づくりに協力できたら」とその思いを話します。カードとクッキーは、22人の組合員ボランティアが3日間かけて袋詰め作業を行ない、共同購入の職員が届けました。

カードを受け取った組合員からは、「早速飾りました」「思いがけない

カードとお菓子にととても感激しました」といった電話が何本もいわて生協本部にかかってきました。

いわて生協では、ひなまつり、七夕など、季節のイベントごとに沿岸部の組合員にカードを届ける取り組みを行っており、「継続して応援すること」に力を入れています。



お菓子とクリスマスカード。

復興のシンボル仙台白菜が、大きく育ちました

食のみやぎ復興ネットワーク「仙台白菜プロジェクト」収穫祭



収穫を行なう高橋理事（左）とJA全農みやぎ大友さん。

「食のみやぎ復興ネットワーク」はJA全農みやぎや地域の高校と協力して仙台白菜プロジェクトを進めています。11月24日には収穫祭が行なわれ、白菜の種まきや定植に参加した人たちが集合しました。

白菜プロジェクトには地区の組合員委員も参加しています。組合員理事の高橋誠子さんは、「みんなで白菜

レシピを考えて、メンバー（組合員）さんに仙台白菜を広めようと話してるんですよ」

JA全農みやぎの大友良彦さんは、ある風景が心に残っていると言います。「震災後、東松島のがれきの中で黄色い花が咲いていたんです。白菜の花でした。この白菜で宮城が元気になれる。そう思いました」

みやぎ生協では、仙台白菜の普及にあたって15秒のTVCMを作成。11月10日から1週間、地元のテレビ局で流しました。TVCMでは、祖父の代から仙台白菜を作っている岩沼の生産者、高橋 宏一さんが畑で「いっぱい、食べてください」と笑顔

で呼び掛けます。

食のみやぎ復興ネットワーク事務局の藤田孝さん（みやぎ生協）は、「今後は宮城だけでなく、全国にも仙台白菜のブランドを広げたいです」と話していました。



11月30日にコープこうべ36店舗で行なわれた「みやぎ生協絆フェア」の様子。仙台白菜を中心に、宮城県産野菜が供給された。

今年も開催！ 京都でついた餅を宮城に届けよう

京都生協「復興支援餅つき大会」開催

11月25日、京都生協は「復興支援餅つき大会」と称して京都で餅つきを行ない、その餅を12月1日に宮城県南三陸町と登米市で振る舞いました。

この企画は、2011年の同じ時期にも行なわれており^{※1}、今年は、同じく南三陸町で支援を行なう大阪いずみ市民生協も参加しました。

●まずは、京都で餅つきを

11月25日、京都生協の職員ボランティアが中心となって企画した「復興支援餅つき大会」が京都生協本部（京都市南区）で実施されました。

餅米は、京都生協の取引先である鳥取県畜産農業協同組合（以下、鳥畜）が安価で提供。なおこの餅米は鳥取で暮らす幼稚園児と小学生に、田植えや稲刈りの経験をしてもらう催しを兼ねて育てたものです。

お昼前には、東北から避難し、京都市山科区や宇治市の公営住宅などで暮らす方々も参加し、できあがった丸餅は約8,000個になりました。

●京都からの餅が宮城へ到着

1週間後、京都生協の職員ボランティア26人と、鳥畜、大阪いずみ市民生協、みやぎ生協のボランティア等総勢70人が、餅と約1頭分となる200kgの鳥取牛などを持って、志津



振る舞いは、行列ができるほどの人気っぷり。



餅つきは、京都だけでなく、登米市でも行なわれた。餅つきの掛け声に、仮設住宅にぎわう。

川漁港（宮城県南三陸町）と登米市南方仮設住宅を訪問しました。

宮城県漁協志津川支所からは、この秋に震災後初めてとれたカキを使ったカキ汁が振る舞われました。支所のかき部会長の遠藤勝彦さんによれば、現在は資材不足もあり「かつての3分の1強の規模」でカキ漁を再開しているとのこと。

会場には、8月に京都生協が主催した「海の虹プロジェクト」^{※2}に参加した中学生も来ており、職員との再会を喜んでいました。

お餅と鳥取牛のサイコロステーキ、大阪いずみ市民生協が提供したおにぎりや漬け物を味わった南三陸町と登米市の方々からは、「おいしい！」との声があがっていました。

●今後は事業としての支援を

京都生協職員ボランティア活動のリーダーを務める福永晋介さんは、現地での支援内容について「がれきを片付けたり、養殖再開に向けた作業のニーズは、前に比べると小さくなってきました。今後は生協の事業

としての支援をぜひ実現させたい。2カ月に1度は南三陸町に行き、現地の方とお話をしてきましたが、仕事があるということは何よりも人の表情を明るくする、と思うようになりました」と話します。

また、「復興の担い手となっていく子どもたちを支えるという視点が必要です。まずは応援している人がいること、自分たちが1人でないことを感じてほしく、8月に『海の虹プロジェクト』を企画しました。京都の名所だけを回るのではなく、過疎が進む地域を訪れ、人口が減っていく厳しい環境の中でも希望を持って、ふるさとづくりをしている人々とふれあう時間もつくりました。多くの方が協力してくださりうれしかったです」

福永さんの言葉には、日々変化するニーズに対応しながら、被災地の10年先、20年先を見据えた支援を今後も継続してやっていくという決意がにじみ出ていました。

※1 関連記事：本誌9号掲載。

※2 南三陸町の子どもたちを京都に呼び、沢登りなど自然とふれあえる体験や、過疎が進む地域の人々との交流などを実施した。（関連記事：本誌21号掲載）

被災住民の声を受け止め、応え、伝えていく

みやぎ生協の被災者懇談会に 120 人参加



仙南地域で開催された被災者懇談会の様子。

みやぎ生協では、「被災者懇談会」を9月21日～10月20日の日程で、仙台市太白区・同若林区・同宮城野区・同青葉区・多賀城市・石巻市・県北地域・仙南地域にある計8カ所の生協施設で開催し、仮設住宅の住民が合計で120人参加し

ました。この企画は、昨年に引き続き開催されたものです。

懇談会では、生協の事業に対する要望や行政に対する要望（再建計画を急ぐ声、消費税増税に対する不安、仮設住宅の設備に関する要望など）、メンタルヘルスケアを求める声などが出されました。

みやぎ生協では、それぞれの意見に対して、一つひとつ対策を提案しており、それをもとに、首長、県議・市議との懇談のテーマとする予定です。また、開催地の一部では、みやぎ生協が住民と市の担当部局をつなぎ、住民懇談会の開催も予定されています。

参加者の中からは、「このような会をまた開催してほしい」という意見が多く出されており、再度の開催が検討されているほか、被災者支援制度や法律に対する理解が必要との意見も出されており、弁護士を講師に説明会も行なう予定です。



昨年の懇談会の様子は本誌5号に掲載。

あったかく冬を過ごしてほしい

コープあいづ、ちゃんちゃんこや使い捨てカイロを仮設住宅にお届け



ちゃんちゃんこを選ぶ、住民の皆さん。

12月5日、コープあいづ理事長の荒井信夫さん、役員室の新山敦司さんが、福島県双葉郡大熊町にある仮設住宅で避難生活をされている方に、ちゃんちゃんこ27枚、使い捨てカイロ約400個、バスタオル100枚をお届けしました。この取り組みは昨年に引き続き行なわれた

もので、昨年は相馬双葉漁協へ、今年は、移動販売の販売先として交流が始まった仮設住宅の方へのプレゼントとなりました。

ちゃんちゃんこは、コープかながわの組合員（和裁サークル）が手作りで、それぞれメッセージが添えられています。使い捨てカイロとバスタオルは、コープぎふの組合員からのプレゼントです。コープかながわの組合員とは、震災前から組合員活動を通じて交流があったことから、今回の取り組みとなりました。

ちゃんちゃんこは、60歳以上の住民がいる世帯に1枚ずつ配布しました。カラフルな柄と手作りの暖か

さが感じられるちゃんちゃんこに、「会津の冬は寒いから家事など行なう際に、大変助かります」などといった喜びの声が寄せられました。



ちゃんちゃんこには、1つひとつメッセージがつけられていた。

被災地から遠い地で、何ができるか

岡山で、震災支援交流会開催



グループ交流では活発な意見交換が行なわれた。

日本生協連は、12月12日、オルガホール（岡山市）にて、「震災支援交流会 ～忘れない 3・11～」を開催しました。この交流会は、被災地から遠い地域での支援のあり方について考えるため、主に西日本の生協を対象に行なわれたもので、17会員生協121人、報告者・事務局含め計133人が参加しました。

交流会は、被災地生協からの報告、支援生協からの活動報告と続き、最後にグループ交流が行なわれました。ここでは、忘れないための支援、遠くにいてもできる支援について、「毎月11日を募金の日にする」「被災地の商品を身に付け、周りの人に伝える」「手作り商品の制作者との交流の機会をつくる」などの意見が出されました。

被災地生協への質疑応答では、「仮設住宅に住んでいる人や被災地では、どのような支援が求められているか」との質問が出され、「本音で話してもらうために、手紙を送る、名前を覚えるなど同じ人とのつながりを作ってほしい」、「地域でお金が

回ることが大切。支援されるばかりでなく、商品作りなど一緒に行動したい」、「（福島の組合員理事より）県外の人が福島の商品を購入しているのを見るだけでも元気になる。放射能についてきちんと学び、正に評価してほしい」などといった意見が出されました。



「忘れないためにできる支援」、「遠くにいてもできる支援」についてのアイデアをポストイットに書いて共有。

18カ国の協同組合で「災害時における役割」を確認

神戸で、第7回アジア太平洋協同組合フォーラム開催



ICA-APフォーラムの様子。

11月28日、第7回アジア太平洋協同組合フォーラムが神戸国際会議場で行なわれました。これは、日本で初めての開催となった第10回国際協同組合同盟アジア太平洋地域（ICA-AP）総会のプログラムの1つとして開催された企画で、18カ国より約500人が参加しました。

フォーラムは「災害時における協同組合の役割」というテーマのもと行なわれ、冒頭のあいさつで、国際協同組合同盟（ICA）会長のポーリン・グリーンさんは「東日本大震災の4カ月後に現地を視察しましたが、現地での協同組合のさまざまな活動に胸を打たれました。日本の協同組合の災害時活動は世界の模範だと思います」と述べました。

フォーラムでは、災害に関する基調講演や東日本大震災の報告のほか、阪神・淡路大震災の報告、また、タイの洪水、スリランカの津波被害、インドネシアの津波被害、フィリピンの洪水災害について報告がありました。各報告には、協同組合が災害

からの復興にどう力を発揮できるかについて言及され、協同組合が「コミュニティをベースにした組織であり、組合員のニーズを正確に捉えることができること」などの強みが出され、共有されました。

また、会場発言として福島県生協連会長の熊谷純一さんから「東京電力福島第一原発事故についても、記憶と記録にとどめることが大切で、フォーラムの決議で原発事故についてふれてほしい」との発言があり、決議文は修正のうえ、翌日開催された地域委員会で承認されました。

2013 年に向けてのメッセージ

～被災地復興支援の取材で出会った皆さんから読者への伝言

【サンガ岩手】
代表 吉田 律子さん



サンガ岩手では、岩手県大槌町で「心の伴奏者」として、自前の施設である「サンガ岩手おうち工房」にて、手作り品の制作・供給による被災者の仕事づくりや、技術向上のための研修などを行なっています。仮設住宅では、狭いコミュニティの中、気丈にしていなければなりません。この工房に来ることで、自分の心を開放してほしい、そして、人と出会い、技術を学び、前に進むステップにしてほしいと思っています。

若い人たちは、なかなか進まない復興の現状に、内陸で暮らすために大槌を出て行っています。街づくりは、複合的です。全国のさまざまな知識を持っている方々に、大槌に力を貸していただきたいです。被災地は、まだまだ支援を必要としています。

サンガ岩手 HP → <http://sangaiwate.org/>（「サンガ岩手」で検索）

【NPO 法人 再生の里 ヤルキタウン】
理事長 熊谷耕太郎さん



ヤルキタウンは、12月15日に1年半の準備期間を経て、岩手県陸前高田市米崎町にオープンしました。壊滅状態の陸前高田には、何店舗かの仮設店舗はありますが、買い物だけをして帰る、といった場所になっており、そこでゆっくりできるような環境になっていません。うつ病や孤独死などの二次的被害者が増えている中、これ以上犠牲者を増やさないため住環境の整備が喫緊の課題です。

そこで、「憩える！集える！元気を発信する！コミュニティ広場」をキャッチフレーズに、被災者や地域の方が平日ないし、一日、ゆっくりと過ごせるスペースをつくりました。お茶を飲む場所、直売所、ビデオレンタル屋、ワークショップを行なうスペース、地域の方が野菜を育てる「園芸広場」などがあります。「子どもパーク（砂場）」の設置や花が咲き乱れる「花画廊」の建設も計画しています。「ヤルキタウン」がにぎわうよう、地区外、県外の方など、少しでも多くの人に訪れていただけたらと思います。

ヤルキタウン blog → <http://ameblo.jp/yarukitown/>（「ヤルキタウン」で検索）

【株式会社 街づくりまんぼう】
代表取締役社長 西條 允敏さん



街づくりまんぼうは、宮城県石巻市の街づくりを2001年から行なっている第三セクターの会社です。震災後も、継続して街づくりに関わってきました。震災直後から、住民が街づくりのために立ち上がっています。石巻の現在の大きな課題は、住む人、そして、石巻を訪れる人の両方を増やすことです。そこで、石巻の住民はもちろんのこと、他の地域の方にも積極的に街づくりに関わっていただき、さまざまな知恵を出し合えたらと思っています。

今、被災地は街の様子が刻一刻と変化しています。がれきが撤去され、家の基礎もならされた場所を見ると、ただの空き地にししか見えません。でも、そこには確かに家があったのです。津波の被害が分からなくなる前に、どうか一度被災地に来てください。そして、一緒に考えるきっかけをつくっていただけたらと思います。

街づくりまんぼう運営の「石ノ森萬画館」HP → <http://www.man-bow.com/manga/>（「萬画館」で検索）

【JA 福島中央会】農業対策部
農業振興課長 和田 光浩さん



JA グループ福島では、福島県の生産者が安心して生産でき、消費者が安心して福島県産の農畜産物を購入できるよう、「農業県福島」の復活と放射性物質に関する安全確保対策に取り組んでいます。東京電力福島第一原発事故の影響で、本県の農畜産物の価格は大きく低迷しています。放射性物質の被害を抑えるため、生産者は真冬の寒風吹き荒れる中、高圧洗浄器で樹木を1本1本洗浄したり、田畑の除染・放射性物質吸収抑制対策を重ねてきました。また、農産物の放射性物質検査についても、米の全量全袋検査や野菜・果物の全戸全品目検査に取り組んでおります。

インターネットで本県の放射性物質の検査結果が日々更新されております（下記 URL）。不明なことには積極的にお答えする対応もしております。福島県の農業の情報を、常にアンテナを高くしてキャッチしていただきたいのです。そして、大丈夫だと思ったら、「支援」というかたちを超えて、震災前のように「当たり前」に取り引きしてほしいと思います。生産者の喜びは、愛情を込めて育てた農作物を消費者の皆さまに「おいしい」と言っていただくことです。「農業県福島」の復活を目指して、福島は歩んでまいります。

「ふくしまの恵み安全対策協議会」放射性物質検査情報 → http://www.ja-fc.or.jp/ja_chuokai/（「ふくしまの恵み」で検索）

酒造り再開 2年目を迎えて

～赤武酒造からのメッセージ

日頃より浜娘をご愛顧いただきありがとうございます。

今年も（震災から）二度目の酒造りが始まりました。早朝の冷たい空気の中、熱い蒸気が舞い上がり酒造りが出来る喜びに胸が熱くなります。今年の酒造りには、私の気持ちを担う若い子が加わり、毎日汗をかき心を込めて醸しています。

赤武酒造が作成した「浜娘」のパンフレット。

※編集部で、文章を一部編集しています。
※関連記事：本誌 17号 & 21号にて古館代表のメッセージを紹介しています。

この一年で私も多くの皆さまとお会い出来ました。浜娘のこと、大槌町のこと、皆さまの熱い想いが伝わり涙したこともありましたが、でも笑うことも出来ました。すぐご縁を感じています。そして皆さまに元気と勇気をいただきながら私は成長してきたと感じています。「浜娘」も同様、「2歳の浜娘」になります。一歳の「浜娘」はじゃじゃ馬の様な元気な娘でした。この一年で私と共に成長した「2歳の浜娘」、この成長を皆さまに見守りいただけたら幸いです。

今年目標は昨年と同様、大槌町の以前の人口と同じ15,994本を春までにお届けすることです。この数は自分自身に勇気と力を引き出すものになりました。厳しいときも、辛いときも、仲間を想い生きて行くことができました。

心より感謝いたします。

第一回、蔵出し日 12月15日

第二回、蔵出し日 12月26日

赤武酒造（株）

代表 古館秀峰



「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に行き、見たもの、感じたものをお伝えしていきます。

「もう年が暮れるのに、おばあちゃんはまだ帰ってこないの。お葬式は出したけれど……」

宮城県の沿岸地域で、被災したAさんはため息をついた。

宮城も岩手も福島も、街の中心部はだいぶ復興も進んできたように見える。だが、沿岸部などはまだ時間がかかりそうだ。Aさんのようにご家族が見つからない方も多い。さらに2012年は、5月の豪雨で気仙沼など広い範囲で住民に避難勧告が出され、12月には再び大きな地震が起こるなど落ち着かない。

私もつい「被災地」と一言でくくってしまうのだが、災害の事情は地域によ

てさまざま。がれき処理も、放射性物質の問題も解決していない。今後はさらに各地の状況に応じた対応が必要だ。

「でも、生協さんは地域みんなの気持ちも分かってくれているから、助かるわ」

被災した生協の職員や理事が力を合わせて組合員さんのために迅速に動き、それが今も続いている。Aさんだけではない。訪れた街では本当に多くの方々から、このような感謝の言葉を聞いている。

12月16日に投開票が行なわれる第46回衆院選の選挙戦で、多くの党が福島県で第一声を上げた。福島の皆さんは「期待半分といったところ」（農業を営むBさん）だとか。さて……。

※コラムは、2012年12月11日に作成。



青空の下でラジオ体操。南三陸の集会場にて。
※写真と本文は関係ありません。

支援募集情報

岩手県生協連：山田ソントハウスへの軽食支援として、180万円が必要です。可能な金額でかまいませんので、ご支援よろしく
お願いいたします。連絡先は、岩手県生協連専務理事 吉田 敏恵さん (019-684-2225) まで。

いわて生協：

新着

●田老町漁協「真崎わかめ」の販売協力。

※壊滅的な被害を受けた、田老町漁協が今年春収穫した「真崎わかめ」。放射性物質の風評被害で全国での
販売が伸びず大量に残っています。岩手県、いわて生協の検査で放射性セシウムは検出されていません。
ぜひ、販売にご協力をお願いします。連絡先：いわて生協事業本部常務理事 阿部慎二さん (019-687-1441)。



「田老町漁協」(岩手) 真崎わかめ。

新着

●被災地のお母さんたちや福祉作業所などの復興応援商品の販売協力。

※震災から2年近くたち、県内ではなかなか売れなくなっています。委員会単位やイベントなどでの
取り扱いなど、ご協力をお願いします。

※取り扱い商品のリスト、条件などの資料を提供できます。

●被災地ツアー（観光を含んでも可能）、被災地ボランティアツアー

※ご相談いただければ、企画や準備などのご要望にも応じます。少人数での視察のご要望にも対応します。なかなか進まない被災
地の現状をぜひ知っていただきたいです。

新着

上記2点の連絡先：いわて生協組織本部 小野寺 真さん (019-603-8299 月～土 9:00～18:00) まで。

みやぎ生協連：

●ふれあい喫茶で使用のお菓子(各地の名産品など)を募集しています。連絡先は、みやぎ生協ボランティアセンター (022-218-3880) まで。

●被災された方の手作り品が掲載されている「手作り商品カタログ」のお届けを始めました。ご希望の方は、みやぎ生協ボランティア
センター (FAX 022-218-3663 またはメール sn.mfukushinet@todock.jp) まで。

新着

みやぎ生協ホームページからダウンロードもできます。 <http://www.miyagi.coop/support/shien/handmade/index.html>

●「全国の会員生協に向けて被災地復興支援ツアー(モデルコース)」のご提案

コープトラベルみやぎでは、「被災地を訪問したいけど、どうすればよいか分からない」などのお問い合わせに応じて、沿岸部での
観光、お買い物を含めた団体・グループ向けの被災地視察モデルコースをご用意いたします。ご訪問の日程・人数に合わせてご手
配・アレンジいたしますので、まずは電話・メールでお問い合わせください。お問い合わせ先：コープトラベルみやぎ担当：東(あずま)
または高橋さん(電話番号：022-717-5081 メール：高橋 喜信 sn.m30853yt@todock.jp) まで。

【被災地復興支援ツアーのモデルコース例】

旅行代金(お一人様)	大人 34,800円/子ども(小学生) 32,800円/幼児(未就学児) 30,800円(4名様1室でご利用の場合) 3名様1室でご利用の場合は各2,000円増し、2名様1室でご利用の場合は各3,000円増し ※上記料金は20名様以上、中型バス利用で算出しております。人数の増減により旅行代金は変わる場合があります。
発着地	仙台空港の発着を想定していますが、仙台駅からでも可能です。(発着地より添乗員が同行します。)
旅行代金に含まれるもの	バス代金、ご宿泊代金(1泊2食)、昼食代(1日目、2日目)、遊覧船代、拝観料、観光ガイド代、ボランティアガイド代、添乗費用
行程(モデルコース)	宿泊予定ホテル：松島センチュリーホテル ・仙台空港発(10:00) === <仙台東部道路> === 塩釜神社(参拝) === 浦霞酒造 酒ギャラリー(お買物) === 松島海岸(昼食) === 松島散策：「五大堂・瑞巖寺(観光ガイド同行)」・円通院(数珠つくり体験)・松島さかな市場にてお買物 === ホテルへ ・松島海岸(9:50) === 遊覧船「芭蕉コース」(所要50分) === マリンゲート塩釜 === 鐘崎笹かま館又は伊達の牛タン本舗(昼食) === 荒浜地区視察 === 閑上地区視察、閑上さいかい市場(お買物) === 仙台空港(16:00頃)

食のみやぎ復興ネットワーク：「宮城県漁協志津川支所」に漁船・船外機・フォークリフト・わかめ収穫用コンテナを、「JA いしのまき」
に海水淡水化装置、いちごの出荷作業用のスーパーハウス(幅2.3m、長さ5.4m、高さ2.6m程度の大きさ)を贈るため、上記物品、
あるいは、支援金を募集。連絡先は、みやぎ生協 藤田 孝さん (022-772-6141) まで。

福島県生協連：

●「福島の子どもの保養プロジェクト」の①スタッフ、②大型連休の保養受け入れ先募集。①は、1カ月単位で毎週末参加可能な方を。
②のご提案は、企画(日程、募集対象者、募集人数、スケジュール、参加者負担額等)を明確にした上で、ご連絡ください。

連絡先は、福島県生協連 根本 喜代江さん (024-522-5334) まで(保養の企画、運営、費用は、主催者にご負担いただけます。ご了承ください)。

●「土壌スクリーニングプロジェクト」ボランティア募集開始。実施内容は、土壌スクリーニング機についての事前学習と放射線測
定です。場所は、JA新ふくしま管内(福島県福島市)で、1日最大6チームを編成し、1日150カ所の測定を目標としています。

応募先は、福島県生協連HP (<http://fukushima.kenren-coop.jp/> 「福島県生協連」で検索。Facebookも始めました。

「土壌スクリーニング」で検索。

本号外部取材スタッフ：秋山健一郎、荒川和巳、野口武、早坂恵美、前川太一郎